

寒さ

芥川龍之介

青空文庫

ある雪^{ゆきあが}上りの午前だった。保吉^{やすきち}は物理の教官室の椅子^{いす}にストオヴの火を眺めていた。ストオヴの火は息をするように、ところと黄色^{きいろ}に燃え上ったり、どす黒い灰燼^{かいじん}に沈んだりした。それは室内に漂^{ただよ}う寒さと戦いつづけている証拠だった。保吉はふと地球の外の宇宙的寒冷を想像しながら、赤あかと熱した石炭に何か同情に近いものを感じた。

「堀川^{ほりかわ}君。」

保吉はストオヴの前に立った宮本^{みやもと}と云う理学士の顔を見上げた。近^{きん}眼鏡^{がんきょう}をかけた宮本はズボンのポケットへ手を入れたまま、口髭^{くちひげ}の薄^{くちびる}い唇に人の好^いい微笑を浮べていた。

「堀川君。君は女も物体だと云うことを知っているかい？」

「動物だと云うことは知っているが。」

「動物じゃない。物体だよ。——こいつは僕も苦心の結果、最近発見した真理なんだがね。」

「堀川さん、宮本さんの云うことなどを真面目まじめに聞いてはいけませんよ。」

これはもう一人の物理の教官、——長谷川はせがわと云う理学士の言葉だった。保吉は彼をふり返った。長谷川は保吉の後ろうしろの机に試験の答案を調べかけたなり、額の禿はげ上あがった顔中に当惑うごそうな薄笑うすえいを漲みなぎらせていた。

「こりや怪けしからん。僕の発見は長谷川君を大いに幸福にしてい

るはずじゃないか？——堀川君、君は伝熱作用の法則を知っているかい？」

「デンネツ？ 電気の熱か何かかい？」

「困るなあ、文学者は。」

宮本はそう云う間あいだにも、火の氣けの映うつつたストーヴの口へ一杯の石炭せいらを浚さらいこんだ。

「温度の異なる二つの物体を互に接せつしよく触せせしめるとだね、熱は高温度の物体から低温度の物体へ、両者の温度の等しくなるまで、ずっと移動をつづけるんだ。」

「当り前じゃないか、そんなことは？」

「それを伝熱作用の法則と云うんだよ。さて女を物体とするね。」

好いかい？ もし女を物体とすれば、男も勿論物体だろう。すると恋愛は熱に当る訣わけだね。今この男女を接触せしめると、恋愛の伝わるのも伝熱のように、より逆ぎやくじよう上した男からより逆上していない女へ、両者の恋愛の等しくなるまで、ずっと移動をつづけるはずだろう。長谷川君の場合などは正にそうだね。……」

「そおら、はじまつた。」

長谷川はむしろ嬉しそうに、くすぐ撥られる時に似た笑い声を出した。

「今Sなる面積を通し、T時間内に移る熱量をEとするね。すると——好いかい？ Hは温度、Xは熱伝導ねつでんどうの方面に計はかつた距離、Kは物質により一定されたる熱伝導率だよ。すると長谷川君の場合だね。……」

宮本は小さい黒板へ公式らしいものを書きはじめた。が、突然ふり返ると、さもがっかりしたように白墨の欠を抛り出した。

「どうも素人の堀川君を相手じや、せっかくの発見の自慢も出
来ない。——とにかく長谷川君の許嫁なる人は公式通りにの
ぼせ出したようだ。」

「実際そう云う公式がありや、世の中はよつぽど楽になるんだが
」。

保吉は長ながと足をのぼし、ぼんやり窓の外の雪景色を眺めた。
この物理の教官室は二階の隅に当たっているため、体操器械のある
グラウンドや、グラウンドの向うの並松や、そのまた向うの赤
煉瓦の建物を一目に見渡すのも容易だった。海も——海は建物

と建物との間に薄暗い波を煙らせていた。

「その代りに文学者は上つたりだぜ。——どうだい、この間出した本の売れ口は？」

「不相変ちつとも売れないね。作者と読者との間には伝熱作用も起らないようだ。——時に長谷川君の結婚はまだなんですか？」

「ええ、もう一月ばかりになつてはいるんですが、——その用もいろいろあるものですから、勉強の出来ないのに弱つています。」

「勉強も出来ないほど待ち遠しいかね。」

「宮本さんじゃあるまいし、第一家を持つとしても、借家のないのに弱つてはいるんです。現にこの前の日曜などにはあらかた市中を歩いて見ました。けれどもたまたまに明いていたと思つと、ちや

んともう約定済やくじようずみになつてゐるんですからね。」

「僕の方じやいけないですか？ 毎日学校へ通うのに汽車へ乗るのさえかまわなければ。」

「あなたの方じや少し遠すぎるんです。あの辺は借家もあるそうですね、家内はあの辺を希望してゐるんですが——おや、堀川さん。靴くつが焦こげやしませんか？」

保吉の靴はいつのまにかストオヴの胴に触れていたと見え、革の焦げる臭気と共に、もやもや水蒸気を昇らせていた。

「それも君、やつぱり伝熱作用だよ。」

宮本は眼鏡めがねを拭いながら、覚束おぼつかない近眼きんがんの額ひたいごしごしにやりと保吉へ笑いかけた。

×

×

×

それから四五日たった後、——ある霜曇りの朝だった。保吉は汽車を捉えるため、ある避暑地の町はずれを一生懸命に急いでいた。路の右は麦畑、左は汽車の線路のある二間ばかりの堤だった。人つ子一人いない麦畑はかすかな物音に充ち満ちていた。それは誰か麦の間を歩いている音としか思われなかった、しかし事實は打ち返された土の下にある霜柱のおのずから崩れる音らしかった。

その内に八時の上のぼり列車は長い汽笛を鳴らしながら、余り速力を早めずに堤の上を通り越した。保吉の捉える下くだり列車はこれよりも半時間遅いはずだった。彼は時計を出して見た。しかし時計はどうしたのか、八時十五分になりかかっていた。彼はこの時刻の相違を時計の罪だと解かい釈しゃくした。「きようは乗り遅れる心配はない。」——そんなことも勿論思ったりした。路に隣った麦畑はだんだん生いけ垣がきに変わり出した。保吉は「朝あさ日ひ」を一本つけ、前よりも気楽に歩いて行つた。

石炭せきたん殻がらなどを敷いた路は爪つま先さき上あがりに踏切りへ出る、——そこへ何なに気げなしに来た時だった。保吉は踏切りの両り側ようがわに人だかりのしているのを発見した。轢れ死きだなどたちまち考えもした。幸

い踏切りの柵さくの側に、荷をつけた自転車を止めているのは知り合
いの肉屋の小僧だった。保吉は巻煙草まきたばこを持った手に、後ろうしから
小僧の肩を叩いた。

「おい、どうしたんだい？」

「轢しかれたんです。今の上のぼりに轢しかれたんです。」

小僧は早口にこう云った。兎の皮の耳みみぶくろ袋をした顔も妙に生
き生きと赫かがやいていた。

「誰が轢しかれたんだい？」

「踏切り番です。学校の生徒の轢しかれそうになったのを助けよう
と思つて轢しかれたんです。ほら、八幡前はちまんまえに永井ながいつて本屋がある
でしょう？ あすこの女の子が轢しかれる所だったんです。」

「その子供は助かったんだね？」

「ええ、あすこに泣いているのがそうです。」

「あすこ」というのは踏切りの向う側にいる人だからだった。なるほど、そこには女の子が一人、巡査に何か尋ねられていた。その側には助役らしい男も時々巡査と話したりしていた。踏切り番は——保吉は踏切り番の小屋の前に菰をかけた死骸を発見した。それは嫌悪を感じさせると同時に好奇心を感じさせるのも事実だった。菰の下からは遠目にも両足の靴だけ見えるらしかった。

「死骸はあの人たちが持つて行ったんです。」

こちら側のシグナルの柱の下には鉄道工夫が二三人、小さい焚火を囲んでいた。黄いろい炎をあげた焚火は光も煙も放たなかつ

た。それだけにいかにも寒そうだった。工夫の一人はその焚火に半ズボンの尻を炙^{あぶ}つていた。

保吉は踏切りを通り越しにかかった。線路は停車場に近いため、何本も踏切りを横ぎっていた。彼はその線路を越える度に、踏切り番の轆^ひかれたのはどの線路だったろうと思ひ思ひした。が、どの線路だったかは直^{すぐ}に彼の目にも明らかになつた。血はまだ一条の線路の上に二三分前^{まえ}の悲劇を語っていた。彼はほとんど、反射的に踏切の向う側へ目を移した。しかしそれは無効だった。冷やかに光つた鉄の面^{おもて}にどろりと赤いものたまっている光景ははつと思ふ瞬間に、鮮^{あざや}かに心へ焼きついてしまった。のみならずその血は線路の上から薄うすと水蒸気さえ昇^{のぼ}らせていた。……

十分じつぶんの後のち、保吉は停車場のプラットフォオムに落着かない歩みをつづけていた。彼の頭は今しがた見た、気味の悪い光景に一ぱいだった。殊に血から立ち昇っている水蒸気ははつきり目についていた。彼はこの間話し合つた伝熱作用のことを思い出した。血の中に宿っている生命の熱は宮本の教えた法則通り、一分一厘の狂いもなしに刻薄こくはくに線路へ伝わっている。そのまた生命は誰のでも好いい、職しゆんに殉じた踏切り番でも重罪犯人でも同じようにやはり刻薄に伝わっている。——そういう考えの意味のないことは彼にも勿論もちろん論わかつていた。孝子でも水には溺おほれなければならぬ、節婦でも火には焼かれるはずである。——彼はこう心の中に何度も彼自身を説得しようとした。しかし目まのあたりに見た事實は容

易にその論理を許さぬほど、重苦しい感銘を残していた。

けれどもプラットフォオムの人々は彼の気もちとは没交渉に
い
ずれも、幸福らしい顔をしていた。保吉はそれにも苛立いらだたしさを

感じた。就なかんずく中海軍の将校たちの大声に何か話しているのは肉

体的に不快だった。彼は二本目の「朝日」に火をつけ、プラット
フォオムの先へ歩いて行つた。そこは線路の二三町先にあの踏切
りの見える場所だった。踏切りの両側の人だかりもあらかた今は
散じたらしかつた。ただ、シグナルの柱の下には鉄道工夫の焚火たきび
が一点、黄いろい炎ほのおを動かしていた。

保吉はその遠い焚火に何か同情に似たものを感じた。が、踏切
りの見えることはやはり不安には違ちがひなかつた。彼はそちらに背せ

中なかを向けると、もう一度人ごみの中へ帰り出した。しかしまだ十歩と歩かないうちに、ふと赤革の手袋を一つ落していることを発見した。手袋は巻煙草に火をつける時、右の手ばかり脱ぬいだのを持って歩いていたのだった。彼は後ろをふり返った。すると手袋はプラットフォオムの先に、手のひらを上に転ころがっていた。それはちようど無言のまま、彼を呼びとめているようだった。

保吉は霜曇りの空の下したに、たった一つ取り残された赤革の手袋の心を感じた。同時に薄ら寒い世界の中にも、いつか温あたたかい日の光のほそぼそとさして来ることを感じた。

(大正十三年四月)

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集5」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年2月24日第1刷発行

1995（平成7）年4月10日第6刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

入力：j.utiyama

校正：かとうかおり

1999年1月5日公開

2004年3月9日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

寒さ

芥川龍之介

2020年 7月12日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>